



- | | | | |
|---|---|----|---|
| 2 | G-COE プログラム
「生存基盤持続型の発展を目指す
地域研究拠点」第1回国際シンポジウム開催
The First International Workshop of Global-COE
Program “In Search of Sustainable
Humanosphere in Asia and Africa” | 10 | 2008 年度科研費プロジェクト・リスト
New CSEAS Projects with the Financial Support of
Grant-in-Aid for Scientific Research |
| 3 | 第2回京都大学東南アジアフォーラム開催
The Second Kyoto University Southeast Asian Forum
(Bangkok, January)

生存基盤科学研究ユニット
New Activity of Kyoto University's Sustainability Science
Unit | 11 | ジョグジャカルタ防災情報拠点・図書館開設
CSEAS Project Site for Earthquake-stricken Area in
Yogyakarta: Opening a new library |
| 4 | 拠点大学・G-COE ジョイントワークショップ
JSPS Core University and G-COE Joint Workshop
“Private Faces of Power and Institutions in Southeast
Asia”
“Labour-intensive Industrialisation in Southeast Asia”
“Populism in Asian Clothes: Thailand and Southeast Asia
in Comparative Perspective” | 12 | 〈東風南信〉Reflections
おかげさまの記 加藤剛
A “Thanks for Everything” Note by Kato Tsuyoshi |
| 5 | 拠点大学交流事業共同研究 8「変貌する『家族』」
JSPS Core University Workshop “The Changing Family” | 14 | 人事
Personnel |
| 6 | ITP「地域研究のためのフィールド活用型現地語
教育」開始
International Training Program for Junior Researchers

外国人研究員制度——シニア客員推薦枠を
2009年4月よりスタート
New Positions for Senior Visiting Fellows beginning in
2009 Fiscal Year | 15 | Colloquia |
| 7 | 自己点検・評価報告書、外部評価報告書刊行
Publication of CSEAS Self-Appraisal Reports and
External Evaluation Report

多言語ポータルサイト“Kyoto University in
Southeast Asia”開設
Multilingual Website | 17 | Visitors' Views |
| 8 | Web ページ「東南アジア研究ネットワーク」公開
Network for Southeast Asian Studies

KSI 連携によるバンドン工科大学への遠隔ビデオ
講義
KSI: Remote Video Lectures | 19 | 東南ア研を離れるにあたって
Message from members who have recently left CSEAS |
| 9 | G-COE ニュース
G-COE News | 20 | 〈海外疾病だより〉
Getting Sick Here and There |
| | | 22 | 〈連絡事務所だより〉
Letter from Liaison Office |
| | | 24 | 研究会報告
Report on Seminars |
| | | 25 | 出版ニュース
Publication News |
| | | 26 | 〈訃報〉チップさん
Memorial to Khun Chip |
| | | | 図書室ニュース
Newly-arrived books at the Library |





G-COE プログラム

「生存基盤持続型の発展を目指す

地域研究拠点」第1回国際シンポジウム開催

グローバルCOEプログラム「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」の第1回国際シンポジウムが、2008年3月12-14日に京大会館で開催された。

本COEの特徴は、アジア、アフリカの環境問題を地域研究の側から総合的に捉える視点を確立することによって、「持続型生存基盤」パラダイムを形成しようとするところにある。初年度の成果の総括を目指したこの会議では、パラダイム形成と、歴史、生態、森林・バイオマス社会、ローカル・ノレッジに焦点をあてた5つのセッションと総括セッションが準備され、中心メンバーによる7本を含む合計16本の報告をめぐって活発な討論が行われた。当初は実質的な討論のための少人数の会議を考えていたが、結果的には院生・若手研究者を含む、延べ120名を超える参加者を得ることができた。

全体の問題意識を私なりに表現す

れば、次のようになろう。一方では、地球温暖化問題などに刺激され、地域研究者も、いわゆる geosphere (地球圏) の安定や biosphere (生命圏) における生物多様性などの多面的な論点に即して、環境の持続性への理解と対応を深めなければならない。しかしそれと同時に、人口の増加や貧困層の生活水準の向上は、これを無理に止めるべきではないのだから、人間の自然へのさらなる介入・改変は不可避でもある。したがって両者の問題意識を融合させ、幅広い文理融合によって、環境の持続性を維持できるような技術や制度を発展させる道を探る必要がある。

討論では、先進国の技術や制度をそのまま移転するのではなく、熱帯の環境の特質を理解し、そこから想を得た技術や制度をどのように発展させていくか、それにはどのような主体の形成が必要かという点が強く意識されていた。森林・バイオマス

社会に関する報告には、先端技術による森林再生の問題点を指摘するものからその必要性を説くものまでが並び、その歴史的・社会的含意も問題とされた。実践のレベルでは、当事者の態度や価値観にひそむ問題が議論の焦点となった。

招待した Alfred Crosby、David Christian、脇村孝平、斎藤修、Endang Sukara、Sara Berry、Andrew Walker、Nandini Sunder、David Sonnenfeldの諸氏の報告は、これらの問題の解明への専門的示唆に富むものであった。その他、コメントやフロアからの発言の貢献も大きかったが、ここでは総括セッションにおける本COE研究員の3本の小報告が将来に大きな期待を抱かせるものだったこと、会議の準備・運営に際し、事務局のすばらしいサポートを得たことを特筆するにとどめたい。

(文責：杉原 薫)

第2回京都大学

東南アジアフォーラム開催

去る1月26日、バンコクにて、第2回京都大学東南アジアフォーラムを開催した。本フォーラムは、京都大学の最先端の研究成果を東南アジアの市民社会に向けて発信するために、本学と現地の教育研究機関や京都大学同窓会組織が共催している。第2回会合は、「持続型社会に向けた技術革新術」というテーマのもと、本学とタイ国における本学の同窓会組織であるKyoto Union Clubが共催した。石油資源に依存した経済発展や環境汚染の進行は多くの国が共有する課題であるが、その技術的解決策は必ずしも一様ではない。タイ社会の歴史や文化を踏まえて、タイ社会の健全な発展を支える技術

開発とは何かについて、タイ歴史研究の観点から石井米雄先生（人間文化研究機構・機構長、京都大学名誉教授〔東南アジア研究所〕）、エネルギー科学の観点から吉川潔先生（研究企画支援室長、京都大学名誉教授〔エネルギー理工学研究所〕）、ナノテクノロジー研究の観点からWiwut Tanthapanichakon 博士（タイ国立ナノテクノロジー・センター所長、Kyoto Union Club 会長）に講演していただいた。新美潤公使、横山俊夫副学長はじめ、日タイ合わせて145名の方に参加していただき、英語、タイ語、日本語が飛び交う和やかな会であった。

（文責：河野 泰之）



石井米雄先生による基調講演

横山俊夫副学長によるオープニング・スピーチ

▲Sucharit Koontanakulvong 博士（チュラロンコン大学工学部）、Krisada Visavateeranon 教授（タイ日工業大学学長）、坂野哲司氏（タイ丸紅社長）、Bambang Subiyanto 博士（インドネシア科学院）によるパネル・ディスカッション

生存基盤科学研究ユニット

東南アジア研究所と本学宇治地区の4つの研究所の連携を進め、生存基盤科学という新たな研究領域の創成を目指す生存基盤科学研究ユニットが3年目を迎えた。この2年間は、ユニット長である井合進教授



▲メコン川上流域における道路建設による斜面崩壊（中国・雲南省）

（専門は地盤工学）のもと、3つの総合研究、2つの融合研究、13の萌芽研究を実施し、防災学、生存圏科学、化学、エネルギー科学、そして地域研究という異分野間の交流を推進してきた。当初は相互理解を深めることから始まったが、2年間で相乗効果が期待できる研究体制になってきた。当研究所が主導した「山地資源の持続的利用のための技術融合と制度設計——東南アジアを中心として」では、防災研究所との連携のもと、大河川における土壌侵食の主たる要因が、これまで考えられてきた農地などの面源ではなく、インフラ整備のための点源、とりわけ道路建設であることを明らかにした。こ

れは、国際河川流域においては、上流国における未熟な土木技術による地域開発が下流国の河川環境を劣化させることを示唆している。生存基盤科学研究ユニットでの研究活動は、技術研究を包摂した地域研究という新たな方向性を示している。

なお、今年4月からはユニット長に小西哲之教授（専門は原子エネルギー学）が就任され、当研究所からは前述の研究課題に沿って、新たに「ベトナム・ハノイ都市基盤形成過程とモデリングに関する研究」を行っている。

（文責：河野 泰之）

“Private Faces of Power and Institutions in Southeast Asia”

2007年12月6-7日、バンコクのロイヤル・シティホテルにて、拠点大学交流事業とグローバルCOEの共催による国際ワークショップ“Private Faces of Power and Institutions in Southeast Asia”が開催された。2009年3月終了予定の拠点大学事業にとっては、本ワークショップは、現在進行中の三つのプロジェクトのメンバーが集まり、最終成果に向けて議論を深めあう機会であった。また、三つのうちの社会運動に関わるプロジェクトを中心にグローバルCOEプログラムとの共催で行われた。開催にあたっては、拠点事業のタイ側カウンターパートであるタマサート大学が現地ロジスティクスを担当、National Research Council of Thailandと日本学術振興会から支援を得た。

初日午前は合同セッションで、水野所長の開会の辞の後、NRCTのAnon Boonyaratavej氏、日本学術振興会バンコク・センター長池島耕氏それぞれのあいさつの後、基調講演が行われた。Benedict Anderson教授は、“Are Networks and Extended Families

the Enemies of Serious Democracy in Southeast Asia? — The Crisis of Political Parties”、Suraporn Nitikraipotタマサート大学学長は、“Globalization and Asian Societies”とそれぞれ題して講演された。タマサート大学関係者をはじめ、外部の参加者も得て、熱のこもった講演に質問も多かった。アンダーソン教授の基調講演は、本プロジェクトの様々なテーマを取り上げて、東南アジアの現在において社会科学として取り組むべきテーマについて論じられた。スラポン学長は、法学者の立場からアジアのグローバル化の経験がもたらした変化から社会科学として注目すべき点を提示された。

その後は、初日夕刻に合同でそれぞれのプロジェクトが、現在の進行状況を報告しあう機会を持ったほかは、各プロジェクトに分かれ、発表と討論の場をもった。

●プロジェクト7「社会的抵抗とグッド・ガバナンス」:いくつものサブテーマを掲げて進められているが、今回はそのうちの社会運動のテーマでメ

ンバーが集まった。二日間で13本の論文発表に対して討論者を用意し、議論した。

●プロジェクト8「変貌する『家族』」:本プロジェクトは初年度以後、海外メンバーが一堂に会する初めての機会であり、各自20分程度で14名が発表し、全員で討論をし、今後追及すべきサブテーマが数点浮上した。

●プロジェクト9-1「アジア比較経済史——制度と環境」:メンバー5名の論文発表が行われ、パースック・ポーンパイチット氏らも討論者として参加し活発な議論が行われた。

●プロジェクト9-2「アジアにおける政治ネットワーク」:今ワークショップで初めて立ち上げたサブプロジェクトで、5名の論文発表が行われた。

各会場では、親しい雰囲気の中にも活発な議論が行われ、タマサート大学側の尽力により、滞りなく和気あいあいとした二日間であり、それぞれのプロジェクトで課題と収穫を持ち帰った。本ワークショップのプロシーディングスは二巻に分けて印刷された。

(文責:速水 洋子)

“Labour-intensive Industrialisation in Southeast Asia”

「東南アジアの労働集約型工業化」を論じる国際ワークショップが3月1-2日に東南アジア研究所で開催された。

戦後の東南アジアでなぜ急速な工業化が成功したのかについての歴史的研究は、拠点大学交流事業 共同研究9「アジア国際経済秩序——歴史的展望」のメインテーマの一つである。その背後には、西洋の資本集約型・資源集約型工業化とは異なる労働集約型・資源節約型の工業化が東アジアで実現したこと、東南アジアでは、一方では西洋

列強の植民地支配やアメリカ主導のグローバル化の影響を受けると同時に、明治の日本に始まる東アジア型工業化の影響を受けたのではないかという問題意識がある。

他方、西洋の資源集約型発展径路と東アジアの資源節約型径路との違いとその熱帯への影響は、グローバルCOEのイニシアティブ1「環境・技術・制度の長期ダイナミクスの研究」の関心の一つでもある。

本ワークショップでは、拠点事業9のこれまでの研究成果の報告(杉原、

Pasuk Phongpaichit, Thee Kian Wee, 水野広祐, Porphant Ouyyanout)に加えて、日本、東南アジアの現状、インドの事例研究の報告(山形辰史、谷本雅之、脇村春夫、大石高志)や、東南アジアの政治、国際秩序をふまえたコメント(白石隆、Chris Baker)を得て、本テーマに関する比較史的、学際的な視野を共有することができた。

(文責:杉原 薫)

“Populism in Asian Clothes: Thailand and Southeast Asia in Comparative Perspective”

2008年3月7日と8日、京大会館において拠点大学交流事業とG-COEプログラム「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」の共催で、国際ワークショップ「アジアにおけるポピュリズム」を開催した。このワークショップは、2007年3月に開催した「2006年タイクーデターからの東アジア社会政治経済への問いかけ」(拠点大学交流事業)において、パスーク氏がタイのタクシン首相を「新自由主義

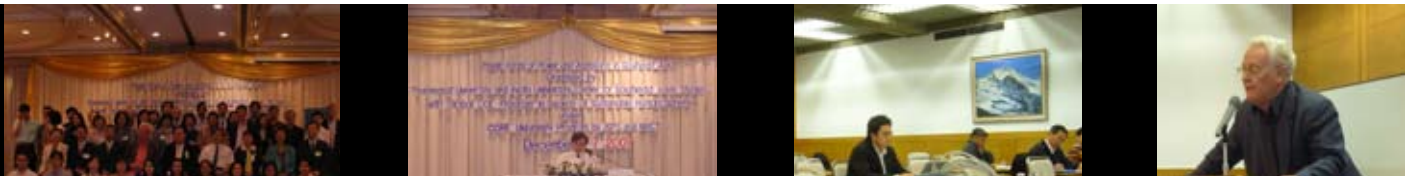
的ポピュリスト」だと分析してみせたことがきっかけとなっている。初日は、パスーク氏、ヌアンノイ氏、玉田芳史氏がタイのタクシン政権について発表を行った後、大嶽秀夫氏がポピュリストという視点から日本の小泉純一郎元首相について発表を行った。クリス・ベーカー氏、川中豪氏がコメントを行った。

翌日は、タクシン政権を比較の視点から捉えるために、インドネシア(岡

本正明) フィリピン(ジョエル・ロカモラ氏)、マレーシア(クー・プー・テイク氏)におけるポピュリスト的政治リーダーについての発表が行われ、P・アビナーレス氏、水野広祐氏がコメントを行った。最後に、B・アンダーソン氏が本ワークショップの総括的なコメントを行った。この成果は東アジアの事例も含めて出版する予定である。

(文責：岡本 正明)

▼Populism in Asian Clothes ▼



▲Private Faces of Power and Institutions in Southeast Asia ▲

総括コメントをするB. アンダーソン氏▲

拠点大学交流事業国内研究会 共同研究8「変貌する『家族』」

日本学術振興会拠点大学事業「東アジア地域システムの社会科学研究」共同研究8「変貌する『家族』」では、3月22-23日の2日間にわたり、これまでの活動状況を振り返りつつ、具体的な成果出版に向けて各メンバーの共通理解を構築すべく、国内メンバーが集って研究会を実施した。初めに代表者速水洋子氏から、昨年12月にバンコクで開催された国際セミナーにおける海外メンバーの報告および討論の紹介があり、続いて各メンバーがそれぞれの研究関心と進捗状況について報告した。

プログラムは次の通りである(敬称略)。1日目は「植民地主義・家族・一夫多妻婚」というテーマの下、「近代

シヤムにおける遺産相続問題」(小泉順子)、「植民地支配と婚姻規範——20世紀初頭西スマトラにおける多妻婚論争を中心に」(山田直子)の報告があり、次に「国家・イデオロギー・政策」において、田村慶子と馬場雄司の両氏が、それぞれ「シンガポールの変貌する家族とジェンダー」「北タイ村落における家族の力強化計画」というタイトルで報告した。続いて2日目、「移動と家族」というテーマの下、「移民と母村とのつながり——フィリピンサマル島の漁村を例として」(細田直美)、「ベトナムにおける移動と家族——二つの故郷の間で」(岩井美佐紀)、「ビルマカレン州タンマニャー山における移動と

家族」(土佐桂子)、「ラオスにおける家と移動」(吉田香世子)、「東北タイの移動労働者と家族」(木曾恵子)、「三つの地域のカレンにおける家と家のつながり」(速水洋子)の報告が続いた。さらに「宗教と家族」をテーマにして、伊藤友美氏から「タイにおける女性の出家修行と家族との関わり」について、また高橋美和氏から「カンボジアの老年期ライフスタイルとしての寺院暮らし」についてご報告いただいた。最後に今後の計画について確認し、それぞれ新たな「宿題」を胸に2日間を終えた。

(文責：小泉 順子)

「地域研究のためのフィールド

活用型現地語教育」開始

2007年9月から若手研究者インターナショナル・トレーニング・プログラム (ITP) 「地域研究のためのフィールド活用型現地語教育」がはじまった。大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 (ASAFAS) と東南アジア研究所とが担当機関となる日

本学術振興会の事業であり、5年間続く。東長靖氏 (ASAFAS) をリーダーとして、東南アジア研究所からは岡本正明 (副リーダー)、小泉順子氏 (担当教員) が参加している。

本プログラムの目的は、ASAFAS 若手研究者を各々の研究分野に適つ

た現地研究機関に派遣して、専門性の高い語学教育を受けさせることである。現在、アジア、アフリカ、そしてイギリスとフランスに12のカウンターパート機関があり、本事業を支援してくれている。昨年度は7人の学生が派遣され、皆、予想以上に語学力を高めて帰ってきた。今年度は前期に6人を派遣することが決まっており、プログラムは順調に進んでいる。詳細はウェブ (<http://www.asafas.kyoto-u.ac.jp/itp/index.html>) を見てほしい。

(文責：岡本 正明)

▼授業風景



▲インドネシアのハサヌディン大学にて授業を受けていた校舎

外国人研究員制度——シニア客員推薦枠を

2009年4月よりスタート

東南アジア研究所は、2009年4月から外国人研究員制度にシニア客員推薦枠をもうけることになった。その目的は、東南アジア研究で著名な研究者や東南アジア域内で有名な研究者や知識人を本研究所に招聘して、自らの研究活動に従事すると同時に、これまでの成果を論文や著作として発表してもらうことである。シニア客員には、彼らの知識と経験を活かす形で本研究所の大型プロジェクト (G-COE や拠点大学交流事業など) に参加し、積極的にペーパーを書いて、発表も行ってもらおう。その成果は、『東南アジア研究』や電子ジャーナル *Kyoto Review of Southeast Asia (KRSEA)* に投

稿したり、*Kyoto Working Papers on Area Studies* として出版することが期待されている。シニア客員枠の滞在期間は3カ月から1年の間であり、本研究所の教授会が選考を行う。

(文責：岡本 正明)

The Senior Visiting Fellows Program

Starting in 2009, the Center will launch the Senior Visiting Fellows Program. The aim of this program is to bring eminent senior scholars working on Southeast Asia and/or leading senior Southeast Asian scholars and public intellectuals to Kyoto to work

on their research or publications projects. Senior research fellows will be asked to participate in or lend their expertise to the Center's major projects (notably the Global-COE and Core University Programs) and to deliver one public lecture. They will also be encouraged to contribute to the *Tonan Aijia Kenkyu*, *Kyoto Working Papers on Area Studies*, or the *Kyoto Review of Southeast Asia*.

The duration for the fellowship will range from 3 months to 1 year, and the election process will be by CSEAS faculty nomination.

(Reported by Patricio N. Abinales)

自己点検・評価報告書、外部評価報告書 刊行



1996年から2006年までの10年間にわたる東南アジア研究所の自己点検・評価報告書（和・英）を刊行し、それにもとづいた内外13名の外部評価委員に評価を依頼して、このたび外部評価報告書の出版にこぎつけることができた。思えば、2006年の秋から作業を開始して、2007年8月に和文の自己点検・評価報告書、ついで英文報告書を刊行し、2007年秋の数次にわたる外部評価委員会を経て、外部評価報告書（和・英）の刊行にいたる道のりは、1年半余を有する地道な作業であった。それ

ぞれの役割を分担して総力を結集していただいた全所員のかたがたに対し、編集の責任を担当した者として深甚の謝意を申し上げたいと思う。

研究成果としては、(1)総合的地域像の解明、(2)地域変容と地域間比較、(3)現地社会との協働研究の開始、(4)地域研究を通じた新分野の創成——地域情報学とフィールド医学、といった4本の柱を中心に自己点検を行い、文理融合の包括的東南アジア地域研究を行ってきた研究所の研究姿勢とその業績は、国の内外の外部評価委員からも高い評価を受けることができた。しかし、一方では、前世紀末から始まったグローバル化のもとで、多くの地域において国家間での政治・経済の統合がすすみはじめ、また地球規模で環境問題の悪化という大問題が登場してきた今、研究所もこのような新しい問題群を正面から受け止め、その研究領域・対象や方法を転換・進化させていかねばならない、という

ご指摘も受けた。また国際的発信のためのさらなる努力と、組織的にも全国の研究者コミュニティの意向を反映させる開かれた意思決定の仕組みの構築に対して、貴重なご意見もいただいた。

全国的に、大学附置研究所のレゾナードルが問われてきている現在、研究所だからこそ可能な斬新な研究の方向性、研究所型教育のありかたを創出してゆく責務を求められているものと思う。過去を通覧する自己点検・評価という作業が、あくまで新しい未来の創造へ向けた積極的な営為であることを考えるとき、そこにもられた付託は重いものと受け止めざるをえない。

1年半余のみなさまのご努力に対して、再度、深謝申し上げます。

（文責：松林 公蔵）

多言語ポータルサイト

“Kyoto University in Southeast Asia” 開設

東南アジアにおける本学の調査研究活動は、とりわけ1990年代後半以降、21世紀COEプログラムなどの大型研究プロジェクトや現地大学と提携した教育プログラムを通じて、飛躍的に幅広いものになった。このような現状を踏まえて、当研究所では、バンコクとジャカルタの海外連絡事務所の全学共同利用を進めて

いる。多言語ポータルサイト“Kyoto University in Southeast Asia”の開設は、その活動の一環である。これは、東南アジアの人々、とりわけこれから高等教育を受けようとする若者に対して、京都大学の東南アジアにおける教育研究活動を包括的に紹介することがねらいである。日本語、英語、中国語に加えて、7つの現地

語（ベトナム語、ラオ語、クメール語、タイ語、ビルマ語、タガログ語、インドネシア語）で本学の研究プロジェクトや教育プログラムに関する情報を発信する。各言語表示の最終確認が終わろうとしており、近日中に公開の予定である。

（文責：河野 泰之）

Web ページ「東南アジア研究ネットワーク」公開

<http://cseas.net/>



2008年4月から、新しいWebページ「東南アジア研究ネットワーク」(和文及び英文)を公開した。本Webページは、本研究所及び大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、地域研究統合情報センターの最新ニュースを中心に、研究成果

公開、プロジェクト研究、連携研究などの諸活動を「ヘッドライン」で提示し、ひと目で閲覧いただくことを目的にしている。本研究所の『東南アジア研究』、*Kyoto Review of Southeast Asia*、「地域研究叢書」「ニューズレター」などの項目では、これらが

目次で提示され、各目次から実際の記事やデータベースに容易に検索ができる。また、新着情報や目次などは、地域研究の各部局ホームページの更新と同時に本Webページも更新され、本Webページを通じて最新の情報をまとめて閲覧していただ

くことが可能である。

本Webサイトは、近い将来、国内外での東南アジア研究の動向について、グローバルな視点から「まとまった」且つ「見て判りやすい」ポータルサイトへと発展することを願って構築した、初めての本研究所ポータルサイトである。URLもシンプルなcseas.netとし、覚えやすいようにした。本Webページは、標題のURLを入力いただくか、本研究所ホームページの「リンク集・ポータル」から入っていただける。

本研究所ホームページ www.cseas.kyoto-u.ac.jp と共に是非ご利用いただくようお願いしたい。

(文責：柴山 守)

KSI 連携による バンドン工科大学への遠隔ビデオ講義

「持続可能性」を実現するための学問体系「サステナビリティ学」の構築を目指す京都大学の研究・教育のための組織 KSI (Kyoto Sustainability Initiative) では、教育分野の活動としてアジアに向けた「サステナビリティ学」講義の実現が、ひとつの目標として掲げられている。本研究所は、教育科目として安藤和雄准教授らがオムニバス形式により「東南アジアの環境と社会」を担当すると共に、インターネットを介した遠隔ビデオ講義・会議シス

テムによる講義のための接続実験を行ってきた。その成果として、2007年11月16日、遠隔ビデオ講義の実証実験を兼ね、初めての本格的な講義を水野広祐教授が本研究所東棟2階教室から、インドネシア・バンドン工科大学の研究者や大学院生に向けて行った。講義内容は「インドネシアにおける新たな発展の方向を求めて——生存基盤持続型発展モデルの可能性」についてであり、インドネシア語による2時間の熱心な講義と白熱した質疑応答が行われた。

本研究所は、本年4月から新たに遠隔ビデオ講義担当として、益田岳研究員をチームに加え、現在10数回の講義を行うために準備を進めている。今年度の講義を提供する大学として、バンドン工科大学、ベトナム・ハノイ国家大学などが予定されている。また、インドネシア科学院やインドネシア大学、タイのアジア工科大学などの提携が検討されている。

(文責：柴山 守)



▲東南アジア研究所で講義する水野教授

▲インドネシア・バンドン工科大学で講義を受ける院生

G-COEプログラムでは、パラダイム研究会と4つの研究イニシアティブを中心として、「持続型生存基盤パラダイム」の形成に向けた研究活動が進められている。今回はイニシアティブ2「人と自然の共生研究」が2008年1～2月にかけて行った連携フィールドワークについて報告する。

連携フィールドワークは、自然資源管理、土地・水資源利用、自然地理学などを専門とするメンバー5人を中心として行われた。前半は、50万haのアカシア植林が計画されているマレーシア・サラワク州を対象に、同地域を研究する人類学者も交えて、産業植林が地域住民の生活に及ぼす影響を様々な観点から検討した。後半は、水需給の逼迫した状況

が伝えられているオーストラリア・マレー・ダーリング川流域を対象に、同流域走破と複数の研究機関との議論を通じて、少資源下での水利用・管理の実態を調査した。このフィールドワークを通じて、今後のイニシアティブ2の活動のための研究シーズを獲得することができたと思う。

初年度の活動を踏まえ、今年度のG-COEプログラムではより具体的な研究成果の蓄積が求められる。これまでのイニシアティブ単位での研究活動の充実に加え、イニシアティブ横断型の活動も積極的に推進しながらプロジェクト全体を織り上げてゆくことで、「持続型生存基盤パラダイム」への転換の道筋が見えてくるのではないかと考えている。

(文責：佐藤 孝宏)



▲アワンのロングハウスでの聞き取り調査



▲ANU Water InitiativeのDr. Connellとの会合

2008 年度科研費プロジェクト・リスト

■基盤研究 (S)

- 2005-09 年度
- 地域情報学の創出——東南アジア地域を中心にして
- 研究代表者：柴山 守

■基盤研究 (S)

- 2007-11 年度
- 東南アジアで越境する感染症——多角的要因解析に基づく地域特異性の解明
- 研究代表者：西瀨 光昭

■基盤研究 (A) 海外学術調査

- 2005-08 年度
- ブラマプトラ川流域地域における農業生態系と開発——持続的

発展の可能性

- 研究代表者：安藤 和雄

■基盤研究 (A) 海外学術調査

- 2007-10 年度
- 東南アジアの「非伝統的」安全保障——国家の対処能力と地域協力体制の現状と課題
- 研究代表者：

Patricio N. Abinales

■基盤研究 (A) 海外学術調査

- 2007-10 年度
- アジアにおける稀少生態資源の攪乱動態と伝統技術保全へのエコポリティクス
- 研究代表者：山田 勇

■基盤研究 (B)

- 2006-09 年度
- 東南アジア大陸部における土地利用変化のメカニズム——フィールドワークとRSの結合
- 研究代表者：河野 泰之

■基盤研究 (B)

- 2006-08 年度
- インドにおける労働集約型経済発展と労働・生活の質に関する研究
- 研究代表者：杉原 薫

■基盤研究 (B) 海外学術調査

- 2008-11 年度
- グローバル化時代の東南アジア

における地方政治の新展開——
首都、エネルギー、国境

■研究代表者：岡本 正明

■基盤研究 (B) 海外学術調査

- 2008-11 年度
- 冷戦期アメリカの知的ヘゲモニーとアジア地域政策——フォード財団の学術助成を中心に
- 研究代表者：小泉 順子

■基盤研究 (B) 海外学術調査

- 2008-10 年度
- ドバイで働くフィリピン女性のアイデンティティの再編——キリスト教徒とムスリムの比較
- 研究代表者：細田 尚美

■基盤研究 (C)

- 2007-08 年度
- 半乾燥地における水資源管理の変容が農業水利及び地下水涵養

に与える影響評価

- 研究代表者：佐藤 孝宏

■萌芽研究

- 2007-08 年度
- 防災教育・自然災害復興支援のための地域研究を目指して——コミットメントの経験から
- 研究代表者：清水 展

■萌芽研究

- 2007-08 年度
- 戦前期タイ・中国外交関係に関する基礎史料研究
- 研究代表者：小泉 順子

■若手スタートアップ

- 2007-08 年度
- 東南アジアにおける社会革命と社会的結合の変化・持続——カンボジア農村を中心として
- 研究代表者：小林 知

■若手研究 (B)

- 2008-09 年度
- 「アフリカの角」地域における紛争・貧困のリスクに対処するローカルな公共性の構築
- 研究代表者：西 真如

■若手研究 (B)

- 2008-10 年度
- インドネシア華人の再移民と中国・香港・台湾——バンカ・ブリトゥン州を起点に
- 研究代表者：北村 由美

■若手研究 (B)

- 2008-10 年度
- 資源を巡る対立・協調の多元性と固有性——東南アジアの事例から
- 研究代表者：生方 史数

ジョグジャカルタ

防災情報拠点・図書館開設



▲皆中に入ってしまった

2006年6月から約半年、東南アジア研究所では中部ジャワ震災復興支援募金活動が行われた。募金の総額97,145円を有効に使うため、ジャ

ワの村落部の典型的な景観である屋敷林を利用した活動が企画された。震災で被災したのは社会的な環境だけではない。倒壊した家屋の瓦礫を片づける場所として、あるいは仮設住宅ないし家屋再建のための資材置き場やその予定地となるべく、震災後、自然環境もまた変化したところがあった。社会的復興とともにある自然環境の回復・復元を主要な目的とし、「屋敷林計画」がはじめられた。果樹や草本類、有用樹などの苗を植えつつ屋敷林を整備し、地域の住民が、防災や減災・地域に関する情報にいつでもアクセスできるための防災情報拠点を2007年7月25日に開設した。当日は尾池和夫総長をはじめ多数の京大教職員が出席した。ジョグジャカルタに在住する日

本人の方も多く協力してくださり、小さな活動ではあるが、いろいろな方が関わってくださっている。京大工学部の学生・院生が中心メンバーである「京大防災教育の会（以下、KIDS）」による防災教育活動も定例の行事となっている。この防災情報拠点に、2008年3月22日図書館が開設された。今回、図書館に収められた絵本は、KIDSのメンバーの呼びかけにより、修学院小学校の国際交流サークルの父兄から寄贈されたもの。絵本は、ガジャマダ大学日本語専攻の学生や卒業生の協力により、インドネシア語とジャワ語に翻訳された。子どもから大人までが多く集まる防災情報拠点となった。

(文責：浜元 聡子)

おかげさまの記

加藤 剛

東南アジア研究センター（現東南アジア研究所）に19年1カ月、大学院ASAFASに7年、計26年余の京都大学生活に句点を打ち、龍谷大学に移ってから丸3年が過ぎた。東南アジア研究との制度的な関係は希薄となったが、おかげさまで新職場では、なかなか刺激的な日々を送っている。職場は社会学部コミュニティマネジメント学科、「地域社会を元気にする人材を育てます」が謳い文句である。

学部生相手の講義を恒常的に持つのは四半世紀振りのことだ。初年度には勇んで東南アジアについての講義を開講した。しかし、今の学部生はおよそこの地域に関心が薄いと感じ、それ以降、東南アジアについて教えるのは諦めることにした。ちなみに、毎月送付してもらっている一橋大学同窓会誌に載る学生の留学先を見ても、近年、東南アジアは人気がない。

ゼミと実習指導以外に担当しているのは講義が4つである。そのうちのひとつ、「地域関係論」では、日本と周辺地域の関係史について日本人の起源から始まり現在までを概観し、「地域変動論」では、人類史についてアフリカにおけるヒト属の誕生から21世紀ま

でを扱う。いずれも13回の講義で数万年から数十万年の歴史を論じるもので、それも東南アジアを諦めたのだから、どうせなら自分の知らないことを教えてみようとの無謀さわまりない発想の産物ゆえ、これに付き合わされる学生こそいい迷惑である。実際、最初の2年間、受講生の授業評価は手厳しかった。幸い昨年度は、講義内容がまとまってきたこともあり、評価はやや上向きに転じた。残る2講義は「地域社会論Ⅰ、Ⅱ」で、明治以降の日本の地域社会の変容と将来を論じている。

日本中心の講義を繰り返すうちに、新しい目線で日本と東南アジアの関係を眺めるようになった。これまでは精々ジャガタラお春や南進、大東亜戦争、あるいは戦後の日本の経済進出や開発援助の脈絡でのみ考えていた。東南アジアを、日本とはまったく別の世界として捉えてきたきらいがある。しかし、今は、日本が直面する問題、たとえば農村人口・農業人口の減少や人口の高齢化は、この1世代くらいの間に東南アジアでも確実に進展する現象に違いなく、日本の経験を考えることは東南アジアの将来的問題を考えることに繋がる、との思いを強くしている。

他方、今後、日本は、東南アジアや他所から移民を受け入れつつ、多かれ少なかれ多民族化の道を歩むことになるだろう。そう考えると、日本が多民族社会の先輩・東南アジアから学ぶことはいろいろありそうだ。このように、龍大生活のおかげで、21世紀の東南アジアと日本の関係がぐっと近くに感じられるようになった。

東南アジア漬けて研究に傾斜した京大生活を経て、人生の第4コーナーで学部教育中心の龍大生活に巡り合えたのは、なんとも絶妙な組み合わせだと感謝している。ゼミや授業で相対する学生は、まず全員、卒業後は実社会に巣立っていく。大学院生と異なり、その行きゆく先は会社も業界も様々である。なにを想い、どんな将来を考えているのか。彼らには一体どんな将来が待っているのか。この3月、生まれて初めて卒業研究なるものを指導した9人のゼミ生を送り出し、長いこと考えるのを忘れていた青春、人生、日本の未来といったことに思いを馳せた。そして、4月、新入生の入学。「陽光に机が並ぶ季節きて新歓ビラが躍るキャンパス」、新しい季節の始まりである。

これもおかげさまなのだが、今年度はサバティカルを得ることができ、さらには東南アジア研究所の客員教授に任命してもらった。その手始めの仕事が、5月から6月にかけてのジャカルタ連絡事務所駐在である。京大生活に打った句点を暫し読点に置き換え、来年3月にはどんな形で新句点を打つことになるのか。なんとも楽しみな1年である。

(1979-98年 東南ア研 助教授・教授)



◀ゼミ生との卒業旅行
高知市播磨屋橋にて（2008年2月）

人事

教員人事

< 所長再任 >

水野広祐教授が所長に再選され、東南アジア研究所所長に再任。任期は、2008年4月1日～2010年3月31日。

< 新任 >

木村 周平 特定助教



(グローバル COE)
(2008年4月1日付)
2001年東京大学教養学部超越文化科学科文化人類学専攻卒。03年同大学大学院総合文化研究科超越文化科学専攻文化人類学分野修士課程修了、同年同大学院博士課程入学。04年トルコ国立イスタンブール大学文学部人類学科客員研究員、06年独立行政法人建築研究所非常勤職員、07年日本学術振興会特別研究員(DC2)。

文化科学専攻文化人類学分野修士課程修了、同年同大学院博士課程入学。04年トルコ国立イスタンブール大学文学部人類学科客員研究員、06年独立行政法人建築研究所非常勤職員、07年日本学術振興会特別研究員(DC2)。

[主要論文]

「災害の人類学的研究に向けて」『文化人類学』70(3), 2005. ▽ 「暗い未来に抗して——トルコ・イスタンブールにおける地震とコミュニティ」『文化人類学』71(3), 2006. ▽ 「地震学・実践・ネットワーク——トルコにおける地震観測の人類学的観察」『文化人類学』71(4), 2007.

甲山 治 特定助教



(グローバル COE)
(2008年4月1日付)
2000年京都大学工学部地球工学科卒。02年同大学大学院工学研究科修士課程修了、05年同大学院博士後期課程修了(同大学博士号取得)。同年山梨大学21世紀COE特別研究員、07年京都大学次世代開拓研究ユニット研究員。

後期課程修了(同大学博士号取得)。同年山梨大学21世紀COE特別研究員、07年京都大学次世代開拓研究ユニット研究員。

[主要論文]

甲山治; 田中賢治; 池淵周一. 「現地調査に基づく衛星解析と陸面過程モデルを用いた中国史灌河流域における水利用推定」『水工学論文集』第51巻, 2007年. ▽ Kitamura, Y.; Kozan, O.; Sunada, K. and Oishi, S. Water Problems in Central Asia. *Journal of Disaster Research* 2(3), 2007. ▽ Toderich, K.; Black, C.C.; Juylova, E.; Kozan, O.; Mukimov, T. and Matsuo, N. C3/C4 Plants

in the Vegetation of Central Asia, Geographical Distribution and Environmental Adaptation in Relation to Climate. In *Climate Change and Terrestrial Carbon Sequestration in Central Asia*, 2007.

特定研究員 (グローバル COE)

佐藤 孝宏; 西 真如 (任期 2007年10月1日～09年9月30日)

和田 泰三; 小林 祥子; 孫 暁剛; 藤田 素子 (2008年4月1日～10年3月31日)

非常勤研究員

細田 尚美 (任期 2007年12月17日～09年3月31日)

古市 剛久; 蓮田 隆志 (2008年4月1日～09年3月31日)

< 国内客員部門 >

任期 2008年4月1日～09年3月31日

加藤 剛 教授

1966年一橋大学社会学部卒。68年同大学大学院社会学研究科修士修了。76年コーネル大学社会学部 Ph.D. 取得。78年上智大学外国語学部専任講師。79年京都大学東南アジア研究センター助教授、91年同大学教授、98年京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授。2005年龍谷大学社会学部教授。



[主要著書]

▽ 『変容する東南アジア社会——民族・宗教・文化の動態』(編著), めこん, 2004. ▽ *Adat Minangkabau dan Merantau dalam Perspektif Sejarah*, Balai Pustaka, 2006. ▽ 『国境を越えた村おこし——日本と東南アジアをつなぐ』(編著), NTT 出版, 2007.

梅崎 昌裕 准教授

1991年東京大学医学部保健学科卒。97年同大学大学院医学系研究科博士号取得。同年同研究科助手、2002年東京医科歯科大学大学院講師、05年東京大学大学院医学系研究科助教授、07年同大学院准教授。



[主要著書・論文]

▽ Adaptive Strategies of Highlands-origin Migrant Settlers in Port Moresby, Papua New Guinea. *Human*

Ecology 31, 2003. (共著) ▽「環境保全と両立する生業」『中国・海南島——焼畑農耕の終焉』篠原徹(編著), 東京大学出版会, 2004. ▽『ブタとサツマイモ——自然のなかに生きるしくみ』小峰書店, 2007.

<退職>

小坂 康之(非常勤研究員);中西 嘉宏(非常勤研究員)
遠藤 環(研究員(グローバルCOE))

事務職員人事

□中西正道会計掛主任は、教育推進部共通教育推進課主任へ配置換。後任には、古川大祐医学部附属病院経営管理課主任(1月1日付)。

□森川進事務長は、3月31日付けで定年退職。後任に前田進宇治地区事務部経理課課長。

□谷川嘉奈子総務掛主任は、工学研究科総務課主任へ配置換。後任には、芝田優子薬学研究科主任(4月1日付)。

□今井知子教務掛員は、地球環境学堂・学舎総務・教務掛主任へ配置換。後任には、山崎景東南アジア研究会会計掛員(4月1日付)。

外国人研究者人事

◆外国人研究員

Sun Laichen (アメリカ合衆国)。カリフォルニア州立大学フラートン校史学科准教授。2008年1月4日～6月30日。「初期近代東南アジアにおける火薬技術」



Stephen Joseph Leisz (アメリカ合衆国)。ピシヨップ博物館科学部門研究員。2008年2月1日～2009年1月31日。「東南アジア大陸部の過去50年間の土地利用変化とその環境、経済、政治に与えた影響」



Tazul Islam (バングラデシュ)。アメリカン国際大学ビジネス・スクール教授。2008年3月1日～8月31日。「東南アジアのマイクロ・ファイナンス——バングラデシュの経験との比較研究」



Surat Lertlum (タイ)。チュラチョムクラオ・タイ王国軍大学校准教授。2008年4月1日～9月30日。「リモートセンシングの地域研究への応用」



Ang Choulean (カンボジア)。

プノンペン王立芸術大学シニア講師。2008年5月1日～10月31日。「ヒトと自然の関係性についての比較研究——カンボジアと日本の農民を中心に」



Cut Armansyah (インドネシア)。

インドネシア科学技術研究所図書館受入および蔵書形成課長。2008年5月1日～10月31日。「インドネシアにおける社会問題の図書目録編纂」

◆招へい外国人学者

Rachmina Dwi; Siti Sugiah Mugiahneiesyah (インドネシア)。ボゴール農業大学農学部社会経済学科講師。2008年2月22～27日。「環境調和型農村開発に関する社会経済的研究」

Sri Hartoyo (インドネシア)。ボゴール農業大学経済経営学部開発研究科長。同。「同」

Aronrut Wichienkeo (タイ)。チェンマイ・ラーチャパット大学。2008年3月7～18日。「タイ語三印法典索引に関する研究」

Goh Beng Lan (マレーシア)。シンガポール国立大学東南アジア研究プログラム准教授。2008年3月11日～5月27日。「編集書『東南アジア研究の再考と再焦点化』(Tentative Title: Rethinking and Re-centering Southeast Asia Studies: Perspectives from Southeast Asia)の草稿を完成するための資料収集」

Lim Mah-Hui (マレーシア)。アジア開発銀行(ADB)上級リストラ銀行員。2008年3月10日～5月4日。「アジアの金融危機の研究——インドネシア、フィリピン、タイ及び日本における不良債権への解決策の比較研究」

◆外国人共同研究者

Dicky Sofjan (インドネシア)。プリタハラパン大学国際関係コミュニケーション科学学科講師。2008年3月1日～4月30日。「9.11以降の政治的展望におけるアイデンティティの創造——『自由なイスラム社会』マレーシアのケーススタディ」

Colloquia

“The Meek Shall Inherit the Earth: Or Resource Management for the Poor in Cambodia,”

by Lye Tuck-Po

September 26, 2007

This presentation drew largely from my experiences traveling down the Stung Saen (Saen River) in 2005. I was traveling with a group of boat racers in two racing boats from Kampong Chheuteal to Phnom Penh for the 2005 Water Festival.

Although a great rollicking adventure in its own right, this trip revealed much ethnography about the way poor (rural) peoples deal with resource decline, as well as an oppressive state mechanism that both exploits and tries to mitigate that decline. The specific incidents I narrated concern the fines and levies (like gatekeeper fees) that are extracted throughout the route to Phnom Penh. At its most specific, this presentation told a story about the Water Festival from the point of view of villagers. More generally, it looked at changes in the resource landscape of Cambodia. At the broadest level of generality, it discussed the irony of nation-building in a country that remains fractured by socio-economic disparities.

“Neurodegenerative Diseases in New Guinea,”

by Matsubayashi Kozo

November 22, 2007

Several local diseases in New Guinea have been reported. Among them, neurodegenerative diseases such as Amyotrophic Lateral Sclerosis (ALS) and Parkinson’s Disease, that are of my specialty, are worthy of note. ALS is also called Lou Gehrig’s Disease, after the famous homerun batter

of the New York Yankees in the 1930s who suffered from it. ALS is an incurable and serious disease which is also relatively rare, with a worldwide prevalence of 5/100,000 people; however, its prevalence is mysteriously higher in New Guinea. We reported the actual situation of these diseases in New Guinea through field survey during 2001-07.

“Financing Devotion: Economic Histories of the Southeast Asian Pilgrimage to Mecca,”

by Eric Tagliacozzo

January 23, 2008

Performing the pilgrimage to Mecca is incumbent upon every Muslim who is able to do so as the fifth and final religious pillar of Islam. Yet religious devotion cannot be divorced from the ways and means of performing it, namely the financial wherewithal of undertaking a journey which may be thousands of miles from one’s home. This paper explored the *longue-duree* economic history of the Southeast Asian pilgrimage to Mecca, outlining its early forms as part of the Early Modern Indian Ocean system, its colonial morphogenesis, and finally its modern manifestations in the era of regional nation-states.

“Cinema and Sexuality in Post-Marcos, Post-Brocka Philippines,”

by Rolando Tolentino

February 28, 2008

The contest for the imagination of the recent Philippine nation was instigated by two opposing forces in this period of national history and cinema. Ferdinand Marcos envisioned “Bagong Lipunan”

(New Society), a morally upright, fascist regime that paved the way for the militarization of the nation-space to the drumbeat of support by multinational business and US imperialism. Lino Brocka negotiated between commercialism and the contrapuntal idiom of national cinema to engage the official imaginaries of this nationhood of Marcos.

In the presentation, I historicized the period of contest between the two figures. I dwelled on the specific history of the *bomba* (soft-porn) film genre to flesh out the intertwined national and cinematic histories. I turned to Brocka’s films to foreground the particularities of this contest for the imagination of the nation. I also drew connections between the historical contest and its effect in the present commercial and independent Philippine cinemas.

“Political Passions: Pan-Asianism as Network and its Legacy,”

by Caroline S. Hau

March 27, 2008

A chance encounter between Jose Rizal and Suetaro Tetsuo occurred in 1889 while both were traveling to America and Europe. More broadly, an anti-colonial and anti-imperialist network linked Japanese, Korean, Chinese, Filipino, Vietnamese, Indian, and other Asian activists of different political persuasions during the late nineteenth to early twentieth centuries. Both highlight the role played not just by ideas but by emotions and actions in Pan-Asianist ideology and action. I addressed these, as well as Pan-Asianism’s relevance to ongoing processes of economic integration, institution-building, and cultural interactions in the name of “East Asia Community.”

“Vietnamese Guns and China,
c. 1527-1680s,”
by Sun Laichen
April 24, 2008

This presentation discussed Vietnamese (European-style) guns and their impact on China. During the “century of warfare” in Asia (1550s-1680s), the Vietnamese

fought hard among themselves. The Mac and the Le/Trinh fought for over half a century in north Vietnam during the second half of the 16th century, while the Le/Trinh and the Nguyen fought many battles during 1627-72. The result was that Vietnamese gunpowder technology was pushed to a new, higher level. This technology spread to China in different

ways, but the minority peoples and local powers in the border region played a crucial role. In China this imported technology was used relatively extensively by both anti-government local powers/rebels and government troops in the late Ming and early Qing. It argues that cultural/technological transmission is often two-way .

Visitors' Views

Kyoto's Life As I Knew It



Saulia Saleh

I have been very lucky to be a visiting researcher at CSEAS again after my first stay in Kyoto in 1998. I am really happy in Japan, because this country has nice weather and is very fresh due to lack of pollution. This time, my two cousins had a chance to visit me for one week in Kyoto. Both of them were especially impressed with how the traffic moves in such a regulated way and how pedestrians are respected. They saw that if a pedestrian walked in the zebra crossing, all vehicles would let them go first. Seeing something like this is very rare in Jakarta or other cities in my country!

Almost all the tourist places that we saw, such as Kiyomizudera, were well maintained and so very clean. We also saw young Japanese girls wearing their traditional dress, and my two cousins and I tried it on. I could not imagine that Japanese women in the past could work while wearing so many layers . But the dresses we wore had such nice colors. The Japanese people have good taste in mixing and matching colors to look smart and professional. Although western culture is very common in Japa-

nese life, it is nice that the Japanese still keep their traditional customs as well.

Another thing my two cousins noted was that the people and government of Japan take good care of handicapped persons, old people, and pregnant mothers. Every mode of public transportation reserves special seats for them, and we saw on the bus that although there were some vacant seats, no one would occupy them.

Finally, I should say that I owe a great debt of gratitude to Professor Mizuno as the Director of CSEAS, Kyoto University, for giving me the chance to be a visiting researcher here, and to Ibu Kitamura as the head of CSEAS Library and to all the colleagues and staff of the Center. I do hope I have the opportunity to visit again.

Thank you! (Visiting Research Fellow)



Three Seasons in Kyoto



Roland Tolentino

CSEAS and Kyoto became my place of

work and home for six months. I was here for three seasons—watched the maple leaves turn yellow and red, saw Kamo's riverbanks turn white with snow, and witnessed the sakura's tiny white and pink petals abundantly bloom and quickly fade.

This was the backdrop of working in CSEAS. I looked forward to a stint without teaching, having continuously taught for a ten-year period. The fellowship afforded me time to catch up with past research deadlines and to come up with a manuscript on Philippine neocoloniality and media.

Sometimes, Kyoto's inherent historical beauty was a bit too distracting to work. For a time, it was a place meticulously urban planned to highlight its past, making it a magnet for local tourists. There was no ugly shot of Kyoto, and my friends also became fascinated with the place through the photos in my blog. But too much one-dimensional (historical) beauty can also be overwhelming, as I mentioned to a colleague. I felt at times that I was in a section in a theme park—the historical Japan section that wowed spectators with every inch of the ride. In the end, like a day in the theme park, one gets overwhelmed with the sensory bombardment.

However, I liked biking from Shugakuin to CSEAS in the morning, watching ducks and herons in the cascading and silent flows of the river. I liked biking around the city, but not on weekends when the

sidewalks would overflow with tourists. I hated biking late at night, especially after a few beers.

My six-month stint was a meditation of sorts. It allowed me not just to work on my research projects but forced me—as I spent my time mostly alone—to think about my personal and professional life. And this I welcomed as both demons and angels drove me awake and asleep at nights.

Like the petals that blew away from the sakura, or the foot prints left in the snow, I realized the temporality of life in the grand schema. I pause as I see these sights, and then move forward to whatever needs to be done. (Visiting Research Fellow)



Happy Memories of Kyoto



Nguyen Thi Xuan Binh

This is my first time in Japan. As a visiting research fellow, I had the great pleasure of working at the Center for Southeast Asian Studies. CSEAS is an international center with a strong academic atmosphere where foreign visiting fellows have opportunities to join meetings and seminars. The Japanese professors, researchers, and particularly the library staff, are kind, hospitable, and helpful. Without them I could not have completed and published the bibliography on Vietnam agriculture on time. Working with them has enriched my appreciation of Japanese people and culture.

I am also so lucky to have lived in Kyoto, a very cultural, historical, and beautiful ancient capital of Japan. Visiting old places, beautiful gardens, temples, and shrines was very amazing and serene. I had the chance to enjoy the momiji, the white color of snow, and the cherry blossoms.

And now, in the early days of April, a cherry blossom festival was held in my native

city of Hanoi, part of the activities to celebrate the 35th anniversary of diplomatic relations between Vietnam and Japan. It attracted me and thousands of local people who came to admire real Sakura from Japan.

Every day in Kyoto has been memorable and unforgettable in my life.

(Visiting Research Fellow)



Colorful Kyoto



Ho Dinh Duan

Perhaps my most impressive memory of Kyoto is the changing color of trees. I came to Kyoto in the beginning of October, when the leaves of the trees were still mostly green. The first three weeks I stayed at the Palace Side Hotel and used to walk to the university and back every day. The short cut I took went through the famous Imperial Palace garden, with its huge umbrellas of big trees full of green leaves. A little further, crossing the Kamo River, I could see two endless rows of trees along both sides, with leaves of different colors and shapes. I later learned that these were the famous Sakura trees that would attract thousands of Japanese and foreigners in the spring. As the days passed, and I visited temples and shrines or walked in the hills that surround the city, I recognized that numerous species of trees can be seen in Kyoto.

The greatest event relating to all of these is the Momiji, which in Japanese means “red leaves.” Actually it is a combination of so many colors, from light green, yellow, and brown to the extreme color of red. I was among the thousands of people in the well-known Tofukuji temple on the peak day of Momiji, with a camera in hand hoping to take the best pictures of the colorful

natural surroundings. This was in November. Gradually the mixed reddish color became dimmer, and fewer leaves remained on the trees until snow came in January. It was indeed a very cold winter for me, being from a tropical country like Vietnam. Although it does not snow much in Kyoto, the snow did make a new coat for the trees. One morning in February, I was awakened by a friend who has been living here for four or five years, and she told me that this was a very rare chance to see the Kinkakuji (Golden Temple) under a heavy snow. When we reached the temple, an enormous crowd was already there, but we managed to enter the gate. The picture I took of Kinkakuji covered with snow was really a masterpiece! (I still have it set as the wall paper for my mobile phone.) And white was the dominant color that I saw until late February.

Then the leaves came up again, together with flower buds, more and more, day by day. Then came the time for the most anticipated Sakura blossom, this year forecasted to occur at the end of March. It is a pity that I left Japan just before this wonderful time, but the pictures of Sakura flowers along the Kamo River sent to me by a friend has completed my story about the colorful landscape of Kyoto—the color of Sakura. Out of my six-month stay in Kyoto, besides the best colleagues and professors, I will always keep with me the sophisticated impression about the color dynamics of Kyoto.

(Visiting Research Fellow)



(Re)search at Kyodai Libraries



Sun Laichen

When I just started to work at CSEAS in early January, I learned that Kyodai has 50 libraries, but I have only been to seven of them: the CSEAS Library, the University

Library, the Faculty of Letters Library, the Institute for Research in Humanities Libraries (two libraries), the Faculty of Integrated Human Studies Library, and the Law Library. My (re)search in these libraries is a very fun and enjoyable experience. Initially, for a newcomer who knows nothing about Kyodai libraries, one inevitably gets confused, because each library has its own rules and regulations: cataloging system and call numbers, the number of books one can borrow, the loan period, and penalty for overdue books, etc. are all different, but the rich collections at each library are indeed amazing and rewarding.

The Institute for Research in Humanities Library on Chinese materials (located in the beautiful Spanish style building) is unique. First, the building itself makes me want to work and do research there. The ancient European style hints at a rich history of the Spanish people in Japan, while the pond at the center of the building complex adds more charm to it. Climbing up the stair cases from the stack rooms one gets to the top of the building. There one can have a beautiful view of a large portion of Kyoto city. The most impressive scene is the Chinese word carved on the mountain "dai" or "big." However, the most at-

tractive thing in the library is the rich (and famous in Japan) collection on modern and particularly ancient Chinese texts. I was never so impressed. I saw sources I had wanted to read for many years.

In the Kyodai empire, each library is like the land of a daimyo. Despite the different library systems, the confusing call numbers, I always get the best (world class) service at every library, spend every enjoyable second, and often make fascinating discoveries in my (re)search. For this I say to all the librarians who have helped me: Okini!

(Visiting Research Fellow)

東南ア研を離れるにあたって

Farewell to CSEAS!

ご挨拶と今後の抱負

東南アジア研究所では2年間、非常勤研究員として大変お世話になりましたこと、お礼申し上げます。10回を超える海外調査では、これまで通ってきたラオスだけでなく、初めてインドを訪問する機会も与えていただきました。

その中で、今までにない経験という意味で、特に印象に残っているこ

とがあります。JSPSの研究員としてインドから来日されたチョーダリーさんと、ラオスを訪問した時のことです。ラオス北部の土地利用に関心を持つ彼と一緒に、何百キロもの山道を車で走りました。チョーダリーさんはどこで調べたのか、ラオス最北部の町のひとつにはインド料理店があることをご存知でした。そ

して長旅の末、暗い町並みにその店を見つけると、とたんに饒舌になって店員と身の上を語りはじめました。同じインドでも出身地がちがう店員とは、英語が

共通語のようです。なぜラオスに来たのか、この町での生活はどうか、いつまでラオスにいるつもりだ、家族はどうしてる、インドに帰ったとしても仕事はあるのか……。会話に加わるのできない私は、冷めてしまったカレーを一人でちびちびと食べるだけでしたが、不思議ときびしい気分にはなりません。

私はこのたび2008年4月から、総合地球環境学研究所に研究員として勤務することになりました。今後はおもに、インド北東部や中国西部を訪問する予定です。東南アジア研究所で学んだことを生かして、ラオスだけでなく中国やインドも含めて、東南アジアを広くみるができるようになりたいと思います。



▲2007年7月10日 Get Together にて、岡さん(左)と水野所長(右)とともに。撮影：藤井舞さん。

研究者の基礎体力

日本貿易振興機構・アジア経済研究所 中西 嘉宏

2007年4月1日から2008年3月31日まで東南研の非常勤研究員としてお世話になりました。この4月からは日本貿易振興機構・アジア経済研究所の研究員として、千葉県の幕張で勤めております。幕張は東京から少し遠いのですが、その分のどかな風景がひろがっていて、緑も多く、海も歩いて20分ほどで行けますし、京都とは違った環境のよさがあります。

東南研は私が大学院生活を終えてはじめての勤め先でした。初出勤の日、水野所長から「どんどん研究してね」という言葉とともに辞令を

いただいたことを思い出します。それから1年。研究と事務作業の両立は、私にとってははじめての経験で、思った以上に難しかったのですが、それでも、年明けあたりからずいぶんと慣れてきました。私が研究者として食べていくための基礎体力をつけた場所が東南研だったのかなと思います。ただ、それは所詮「基礎体力」でしかなく、他の先生方は私の何十倍もの仕事量をこなしているわけで、自分はまだまだ力が足りないなど改めて気づかされました。

東南研での経験を生かし、今後も、常に高い目標を掲げながら、焦らず

止まらず地道に研究を続けていきたいと思います。1年間、大変お世話になりました。また、今後ともよろしくお願いいたします。



▲タイ・ミャンマー国境の町、メーサーイにて
(左端 筆者)

東南研を離れるにあたって 挨拶

埼玉大学経済学部 遠藤 環

この4月から、4年間お世話になった東南アジア研究所を離れ、埼玉大学経済学部にて講師として勤務することになりました。アジア経済論やタイ事情などを担当しています。この4年の間、東南アジア研究所のみならず、大学院アジア・アフリカ地

域研究研究科や地域研究統合情報センターなどを通じて様々な方と出会い、ご教示頂いたり、励まして頂いたりしてきたように思います。また、バンコクに滞在していた2年間は、バンコク駐在オフィスの協力のもと、タイに滞在する若手研究者の研究会の開催に関わってきました。現在も引き継がれ続けておりますが、私自身、ここで多くの他大学の学生や研究者に出会うことが出来ました。駐在の先生方が議論に参加して下さることも多く、フィールドにいつつも、研究を発展させる1つの場としての機

能を、徐々に持ちつつあるように思っています。研究会のみならず、私自身の調査地が火災で全焼してしまった際には、駐在されていた様々な先生方に個人的にも、コミュニティに対してもご支援を頂いたことが思い出されます。改めてお礼を申し上げます。

埼玉大学はタイの大学と学术交流を締結しており、経済学部には職を得ることにはなりましたが、今後も東南アジアの都市やインフォーマル経済の研究を深めていく所存です。また東南アジアに関心のある学生が1人でも増えて欲しいと思っております。今後ともどうぞよろしくお願い致します。



▲調査地コミュニティの住民委員会の委員やリーダーと共に
(中段右端 筆者)

海外疾病だより

Getting Sick Here and There

高山病

松林 公蔵

私たち平地に住む人々が、高所(通常2,500メートル以上)に登ると、時に、頭痛、めまい、食欲不振、不眠などの症状におそわれることがある。高所低酸素からくる高山病である。4千メートルを超えると、高所肺水腫、脳浮腫などの致命的な高山病にいたることも少なくない。かつて高山病は、一部の登山者だけの問題であったが、近年の旅行グローバルイズムによって、車や列車で高所を旅する人々が増加し、高山病も激増している。中国の青海省からラサへ開通した標高4-5千メートルを走る高原列車では、すでに数名の日本人観光客が死亡しているという。ASAFASの院生の中には高所をフィールドとする研究者も出始めている。高山病の予防には、ゆっくり登ること、夜の睡眠は昼の活動場所よりも低い高度でとること (High climb, Low sleep)、ダイアモックスなどの薬剤が有効であること、など

経験的医学ノーレジも蓄積されている。しかしいったん発症した高山病の治療となると、とにかく高度を下げることにつきる。

一方、チベット高原には、標高4-5千メートルに累代にわたって生活している高所住民がいる。大気中の酸素濃度が平地の約1/2となるような生理的に過酷な条件を伴う高所に、どうして人が住み着くようになったのかは明らかではない。おそらく、一部の人類が高地向と移動していった主要な要因は、人口圧力による新たな生活環境の開拓とともに、人口密度の高い人間の平地社会がもたらす疫病からの離脱などもあったのではないと思われる。高所では、疫病をもたらす媒介蚊などが生存しにくいだけでなく、疫病発生に必須の人口稠密性からまぬがれており、深い渓谷や湧き水は天然の上下水道ともなって病原菌の繁殖を結果的に抑制している。また外界からの

交通路が峻険な自然条件で制限されているために、外界からの人間を媒介としての疫病も流入しにくい。また、高所では生態資源が限られているために、生業方法に地域固有の絶妙な工夫と住民同士の緊密な協力態勢も認められる。さらには、高所では、チベット仏教やインカの太陽神などのような高度な精神文明さえ築いてきた。

しかし、近年の産業主義、市場経済や情報革命を中心とするグローバルイズムの波及は山岳地帯にも及んでいる。グローバルイズムは必然的に、環境を変質させ、人間の身体的、精神的なありかたをかえる。かつて短命だったチベット高原の住民の寿命も伸びてきたが、同時に生活習慣病も増加してきた。高所低酸素環境下での老年症候群と生活習慣病の予防もフィールド医学の重要なテーマと考えている。(研究所教授)



標高4千メートルの高地に住む高齢者のフィールド検診風景とかたわらの青空学級で勉強する孫たち。若い漢族の小学校の先生が、チベット族生徒の祖父母たちの医学検診のために、校舎を数日のあいだだけわたしてくれ、その間孫たちは校庭での授業となった。

来訪者

タマサート大学学長来訪

3月28日、タマサート大学学長 Dr. Suraphon Nitikraiphon、同国際交流担当副学長 Dr. Chulacheeb Chinwannno、同大総務(ランパーン・キャンパス)担当副学長 Dr. Decha Sungkawan、同大学術担当副学長 Dr. Siriluck Rotchanakitumnuai、および国際交流担当副学長補佐 Dr. Cattleya Ptchsingh の5名の訪問を受けた。東南アジア研究所はタマ

サート大学と日本学術振興会拠点大学事業「東アジア地域システムの社会科学研究」を実施してきた。今回の訪問では12月5-6日に実施された同事業国際シンポジウムが、タマサート大学側の多大な協力の下に成功裏に終わったことに対して東南アジア研究所側から深い感謝の意を表すとともに、2008年度に最終年(10年目)を迎える同事業の成果と



▲スラポーン・タマサート大学学長と共に

今後の発展的展開について協議がなされた。(文責:小泉 順子)

連絡事務所だより *Letter from Liaison Office*

インドネシア発のイスラム恋愛映画

いま、インドネシアで映画『アヤアヤ・チンタ』が爆発的な人気を誇っている。2008年3月に公開されて約1カ月間で、劇場でこの映画を観た人が350万人に上り、歴代1位だった『ビューティフル・デイズ』を軽く破ってしまった。すでに海賊版ビデオCDも出まわっており、実際にこの映画を観た人の数はもっと多くなるだろう。

人気の秘密は、宗教要素が入った恋愛物語だからと言われている。主人公はカイロのアズハル大学で学ぶインドネシア人留学生のファハリで、同じアパートに住んで勉強を手伝ってくれるコプト教徒のマリアや、トルコ系ムスリムで裕福な家系出身のアイシャ、さらに大学の同級生や近所の女性など多くの女性と出会い、

悩みながらも自分の伴侶を見つける。悩む過程でファハリは常にクルアーン(コーラン)の章句などを引き、「イスラム教徒として正しい恋愛とは何か」という観点から道を選ぼうとするため、観客は恋愛物語を追いながら宗教の教義が学べるという仕組みになっている。このため、ふだん映画館に足を運ばない人たちが動員することに成功したらしい。土曜の午後に映画館に行ってみると若い男女でほぼ満席で、客席を後ろから見ると男性の黒髪と女性のカラフルな被り物が交互に横に並んでいた。

『アヤアヤ・チンタ』の人気はとどまるところを知らず、ついに大統領と副大統領まで夫婦で映画館を訪れ、物語に涙している様子が報じら

れた。もっとも大統領たちの目的は映画の鑑賞だけでなく、国産の映画をイスラム教諸国に売り出す可能性を探ることにあつたようだ。国民を海外に出稼ぎに出して「外貨獲得の英雄」と持ち上げていると思ったら、映画があたれば今度はそれを外国に売り出そうとするなど、安易でないかとの印象も受けるが、他方で、インドネシアやマレーシアなど東南アジアのムスリム諸国がイスラム教の要素を入れた映画を作り、それが世界に広まっていくことは、イスラム教やムスリムの多様な現実が世の中に伝わるよい機会になり、その意味では大いに歓迎すべきかもしれない。

(地域研究統合情報センター
准教授)

山本 博之

来訪者

2008年1月17日 Satya Arinanto (インドネシア大学法学部教授・日本研究センター副所長) ▼2月15日 Sudung M. Mahurung (インドネシア大学大学院日本地域研究学科長) 他1名 ▽2月15日 桜井三津子 (国際文化交流真珠婦人の会会長); Adi

Zaharia Afiff (インドネシア大学経済学部) 他1名 ▼2月18日 Alexei Vasiliev (ロシア科学アカデミーアフリカ諸国研究所所長) ▼3月26日 Nguyen Thi Thanh Tam (ベトナム貿易大学) ▼3月28日 Suraporn Nitikraipot (タマサート大学学

長) 他4名 ▼4月7日 Khan A.K.M. Nazibullah (バングラデシュ農村開発プロジェクト責任者) 他1名 ▼4月10日 李占全 (青海大学附属医院副院長) 他5名 ▽4月10日 Panyupa Noparak (ナレスアン大学社会学部学部長) 他17名

連絡事務所だより *Letter from Liaison Office*

冠婚葬祭のバンコク駐在

神崎 護

タイの3カ月があつという間に過ぎようとしている。あれもしよう、これもしよう、計算機の中身をすべて持ってきたものの、半分もできただろうか？ 3カ月の任期の前半は冠婚葬祭の1カ月半となった。

【冠】昨年度の日本国際賞を受賞したP.S. Ashton 博士が、世界の熱帯林めぐりの旅をしている。この案内でチェンマイへ出かけた。あとでタイの友人に聞くと、日本国際賞の賞金でこの旅をしているとのこと。彼が書き上げようとしている50年の熱帯林研究の集大成の本に、私たちの熱帯山地林プロットの写真が掲載されそうだ。

【婚】24年来のカウンターパートの息子さんが結婚するというので、急遽披露宴に出席することに。円卓

が30もなればホテルの大会場だが、開宴の辞もなく、来たひとから飲んでは食べていく。スピーチも2つだけ。とても気楽な会だった。招待状が送られてきた封筒に、祝儀を入れて受付で渡すという、タイにしては意外と合理的なシステムに感心。

【葬】昨年12月に逝去された最古参のスタッフ、チップさんの百日供養に出席。式をとりしきるお坊さんはとても明るく気さくな方。チップさんとも生前とても親しくしていた方ようだ。ところどころで皆の笑いをとりながら式を進めていく。最後は水掛け祭りになってしまった……。

【祭】いよいよ待望のソンクラン。車は消え静まり返ったスクムビット通りだが、Soiにはいると水鉄砲と

ホースを握った男女がたむろしていて、とても危ない。ちょっと怖い顔をして歩いていけば、彼らも少しは遠慮するのだが、結局ラーメン屋の女の子にパウダー入りの水を、頭に塗りつけられてしまった。街中で普通の女の子がこんなに馴れ馴れしく触ってくるのは、ソンクランはやはり特別。

森林研究を本業とする私、いつも電光石火のごとく調査をして帰っていくのだが、今回は、タイの生活を満喫している。残りの任期は、タイらしく、カウンターパートとゆっくり飲みながら次の10年の研究計画を練ることにしよう。

(大学院農学研究科 准教授)

研究会報告

◆ Special Seminar

“CSEAS Foreign Scholar on Peace Keeping in Aceh,” December 25. Ikrar Nusa Bhakti (Visiting Research Fellow, CSEAS) “Peace in Disguise? The Birth of Electoral Politics in Aceh” ▽ Asna Husin (Peace Education Program in Aceh) “Post Tsunami Reconstruction of Aceh”

▼ Satya Arinanto (University of Indonesia) “Indonesian Constitution,” January 17. ▼ Eric Tagliacozzo (Visiting Research Fellow, CSEAS) “Financing Devotion: Economic Histories of the Southeast Asian Pilgrimage to Mecca,” January 23.

▼ “Special Seminar on Indonesian Economy,” March 3.

Thee Kian Wie (Economic Research Center, Indonesian Institute of Science) “Indonesia’s Economic Development During and After the Soeharto Era: Achievements and Failings” ▽ Kosuke Mizuno (CSEAS) “Labor Law Reform and Changes of Industrial Relations in Indonesia, with Special Reference to Labor Dispute Settlements”

◆ 「インドにおける労働集約型経済発展と労働・生活の質に関する研究」研究会

12月2日 神田さやこ (大阪大学) 「19世紀前半期東部インドにおける燃料市場の形成」 ▽ 柳澤悠 (千葉大学) 「南インド農村における経済変動と消費構造——村落調査の中間報告」 ▽ 大石高志 (神戸市立外国語大学) 「近現代インドにおける自転——日本製品の流通と使用に見る労働集約型社会の一断面」

◆ 「英語出版に向けたワークショップ」

第1回: 12月13日 杉原薫 (CSEAS) “The Bumpy Road to Oxford University Press”

第2回: 1月31日 Eric Tagliacozzo (Visiting Research Fellow, CSEAS) “Publishing in English: A Southeast

Asian Studies Vantage”

第3回: 3月6日 Chris Baker (Independent writer, researcher and translator) “Reviewing Manuscripts: Developing Potentials, Spotting Problems” ▽ Paul Kratoska (Managing Director, NUS Press) “English-Language Academic Publishing: What University Presses Are Looking For”

◆ 「東南アジアの自然と農業」研究会

第133回: 12月17日 甲山治 (京都大学) 「中央アジア・アラル海流域の水問題に水文学が果たすべき役割」 ▼ 第134回: 2月15日 佐々木綾子 (京都大学) 「タイ北部山地における伝統的チャ栽培を軸とした生業戦略とその選択要因」 ▼ 第135回: 4月18日 矢ヶ崎朋樹 (財団法人地球環境戦略研究機関) 「自然環境の『資源性』を評価する——植物社会学からのアプローチ」

◆ 「東南アジアの社会と文化」研究会

第34回例会: 11月16日 (共催: 京都人類学研究会) 青木恵理子 (龍谷大学) 「社会変容の固有音と通奏低音——『改革』の時代のインドネシアにおける東部インドネシア・フローレス島の事例に焦点をあてて」 ▼ 第35回例会: 1月18日 (共催: 京都人類学研究会) 信田敏宏 (国立民族学博物館) 「世帯から社会を見る——フィールドワーク技術論(序論)」 コメントーター: 多和田裕司 (大阪市立大学) ▼ 第36回例会: 3月21日 伊藤友美 (神戸大学) 「タイで上座部比丘尼サンガの復興は可能か?——出家の正当性をめぐる諸問題」

◆ 「映像なんでも観る会」研究会

第16回: 11月15~17日 【15日】 監督: ジョージ・クルーニー; ニック・クルーニー 『ジョージ・クルーニー ダルフルへ行く』 ▽ 監督: ザック・ナイルズ; バンカー・ホワイト 『レフェュジー・オールスターズ』 【16日】 監督: モフセン・マフマルバフ 『サイクリスト』 【17日】 監督: ドン・マクブリーティ 『インビジブル・チルドレン』 ▽ 監督: ソリウス・サムラ 『さまよえるスーダン難民』

▽ UNH-CR (国連難民高等弁務官事務所) 製作シリーズ 『アフガニスタン—故郷での平和な暮らし』 『リベリア——新たなる闘い』 『スーダン南部——解決に向けて』

第17回: 12月20日 「社会運動と人々——人はなぜダムに反対するのか?」 監督: Euthana Mukdasanit; Surachai Jantimatorn 『Tongpan』 ▽ 監督: The people of Mae Moon Manyuen Village, Assembly of the Poor 『Rebel with a Real Cause: The Story of the Fight for Truth over the Controversy of Pak Moon Dam』 ▽ 監督: 佐藤亮一 『ダムの水はいらん!』

第18回: 2月15日 監督: 坂上 香 『LIFERS ライファーズ——終身刑を越えて』

◆ 「アジアの政治・経済・歴史」研究会

第2回: 12月18日 George Bryan Souza (University of Texas, San Antonio) “An Anatomy of Commerce and Consumption: Merchants and Opium at Batavia over the Long Eighteenth Century” ▽ Eric Tagliacozzo (Visiting Research Fellow, CSEAS) “Opium Smuggling in Island Southeast Asia during the Long Nineteenth Century”

◆ 「社会文化関連研究部門」研究会

12月19日 Mika Toyota (Asia Research Institute, National University of Singapore) “The Flow of Social Remittance: The Case of Unmarried Burmese Health Care Workers in Singapore”

◆ 「国家・市場・共同体」研究会

1月11日 Teofilo C. Daquila (National University of Singapore) “ASEAN at 40: Revisiting the Past, Looking to the Future” モデレーター: 水野広祐

◆ 「バンコク・タイ」研究会

第26回例会: 1月16日 Ajarn Michael H. Nelson “Introduction and a Short Lecture about Political Background of Supinya’s Cases” ▽ 監督: Pimpaka

Towira 『The Truth Be Told: The Cases Against Supinya Klangnarong』

◆「拠点大学事業『変貌する『家族』』

Shanthi Thambiah (University of Malaya) “Polygamy and Quality of Family Life amongst Muslims in the Klang Valley, Malaysia,” February 7.

◆「地域情報学の創出——ベトナム研究班活動報告」

2月12日 桜井由躬雄(東京大学名誉教授)「ハノイのハンマー、キムリエン地区における現地調査報告」▽岩城考信(法政大学)「20世紀初頭のバンコク地籍図GISデータベースの構築とその利用」▽Ho Dinh Duan (Visiting Research Fellow, CSEAS) “Studies on Hanoi Urban Transition in 19-20c Based on GIS/RS” ▽Truong Xuan Luan (Hanoi University of Mining and Urbanization) “The Development and Urbanization Process of Thang Long – Dong Do – Ha Noi from the Geo Informatics Approach” ▽米澤剛(CSEAS)「ハノイの詳細DEMを用いた都市変容分析」

◆「大陸部新時代」研究会

第2回:2月12日 佐藤(伊藤)まり子(総合研究大学院大学)『『聖室(Thanh That)』に集う人々——現代ベトナム社会の実相に関する一考察』▽田中浩典(東京外国語大学)「南ベトナムにおける大乘・上座仏教の接触——ベトナム乞士派仏教の形成と展開を通して」

◆「近畿熱帯医学」研究会

第12回:2月16日 酒井悦嗣(ジェイアイ傷害火災保険株式会社)「海外旅行傷害保険の上手な入り方」▽佐藤弘明(浜松医科大学)「アフリカ熱帯雨林における地域医療——民俗医学のポテンシャル」▽3月31日 濱田篤郎(海外勤務健康管理センター)「旅の進化とトラベルメディシンの発展」▽堀尾政博(長崎大学)「シャーガス病を媒介するカメムシ——サシガメ」

◆「次世代の地域研究」研究会

第5回:2月16日 森田敦朗(東京大学)「空間の再編としての工業化——タイにおける土着の機械技術の発展と社会性の生成」▽松村圭一郎(京都大学)「市場経済化と空間/集合性の再配置——エチオピア農村社会の行為をみちびくモノ・人・場をめぐる歴史過程」コメント:加藤剛(龍谷大学)▽第6回:3月17日 久保慶一(早稲田大学)「コソボにおける民族紛争と紛争後の『国家』建設」▽末近浩太(立命館大学)「中東政治研究における国民国家・ナショナリズム・宗教」

◆「比較の中の東南アジア」研究会

3月1日(共催:東南アジア学会関西例会)＜東南アジア国軍人事の政治学＞司会:岡本正明(CSEAS)▽山根健至(立命館大学)「フィリピン国軍将校の昇進過程と政治家——任命委員会を中心に」▽玉田芳史(ASAFAS)「タイの軍人事と2006年クーデタ」▽中西嘉宏(CSEAS)「ミャンマー長期軍政下の国軍人事と政治対立のパターン」▽本名純(立命館大学)「国軍改革と人事の政治——ユドヨノ政権期を中心に」▽コメント:白石隆(政策研究大学院大学); 片山裕(神戸大学)

◆「ミャンマー研究会」

3月11日 Aung Kyaw (Yangan Institute of Economics, Myanmar) “Financing SMEs in Myanmar” ▽Thandar Khine (Ministry of National Planning and Economic Development, Myanmar) “An Analysis of FDI Inflow into Myanmar”

◆「農村開発における地域性」研究会

第1回:「世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業——南アジア周縁地域の開発と環境保全のための当事者参加による社会的ソフトウェア研究」3月28日 安藤和雄(CSEAS)「事業紹介——実践型地域研究の摸索」▽南出和代(CIAS)「サイクロン被害で活躍するNGOの現場より」▽矢嶋吉司(CSEAS)「平成19年度事業活動進展中間報告」

◆「東南アジア歴史研究の資料と方法」研究会

3月31日 <東南アジア史における人の把握——国家・「民族」・植民地主義> 小泉順子(CSEAS)「はじめに」▽坪井祐司(学習院大学)「英領マラヤにおける人口統計の変遷とマレー人概念の形成」▽左右田直規(東京外国語大学)「センサスと教科書——英領マラヤのマレー語学校教育における植民地的知の現地化」▽高田洋子(敬愛大学)「仏領コーチシナの地方統治と人口の把握をめぐって」▽伊東利勝(愛知大学)「135の民族から成るミャンマーの成立」▽菅谷成子(愛媛大学)「18世紀末葉スペイン領フィリピンにおける『パドロン』について」▽蓮田隆志(大阪大学)「1778年中越国境密入国事件を通してみるベトナム国家の人的把握と『外国人』」

◆「ハイパー・モビリティ社会」研究プロジェクト

第1回セミナー:3月18日 趣旨説明 細田尚美(CSEAS)▽石橋誠;小張順弘;渡邊暁子;細田尚美「フィリピンにおけるサパララン・モデルの地域間比較——『ハイパー・モビリティ社会』研究・序説」▽森谷裕美子(九州産業大学)「フィリピン・パラワン族の土地問題」▽飯高伸五(東京都立大学)「シューカンから抜け出す方法?——パラオにおける国際人口移動と贈与交換の再編」▽コメント:田中耕司(CIAS);スヘー・バートルガ(愛知県立大学)



出版ニュース

◆『東南アジア研究』45巻3号

Southeast Asian Studies 45(3)

＜ミャンマー少数民族地域における生態資源利用と社会変容＞

「序文」竹田晋也；速水洋子

[バゴー山地の森林生態とカレン焼畑耕作] ▼ Structure and Composition of a Teak Bearing Forest under Myanmar Selection System. Hla Maung Thein; Kanzaki Mamoru; Fukushima Maki; Yazar Minn ▼ Recovery Process of Fallow Vegetation in the Traditional Karen Swidden Cultivation System in the Bago Mountain Range, Myanmar. Fukushima Maki; Kanzaki Mamoru; Hla Maung Thein; Yazar Minn ▼ 「ミャンマー・バゴー山地におけるカレン焼畑土地利用の地図化」竹田晋也；鈴木玲治；フラマウンテイン ▼ 「焼畑土地利用の履歴と休耕地の植生回復状況の解析——ミャンマー・バゴー山地におけるカレン焼畑の事例」鈴木玲治；竹田晋也；フラマウンテイン ▼ 「家と家をつなぐ——バゴー山地カレン焼畑村から」速水洋子

[跨境地域の生態と生活の変容] ▼ 「ミャンマー周縁部における種子ビーズ利用の文化——その継承と創出をめぐる」落合雪野 ▼ 「焼畑、棚田、マレー・コネクション——ミャンマー・チン丘陵における資源利用と経済階層」高橋昭雄 ▼ 「宗教用地における住民の世帯戦略——カリスマ僧没後の変化を中心に」土佐桂子 ▼ 「ソーブワたちをめぐるオーラル・ヒストリー——セーンウィー小史へ向けた覚書き」飯島明子 ▼ 「福祉ホーム入居高齢者の日常生活機能、うつとQOL——ミャンマーの宗教系ホームと日本の養護老人ホームにおける比較検討」松林公蔵他

◆『東南アジア研究』45巻4号

Southeast Asian Studies 45(4)

「バリのこよみ・考——現行太陰太陽暦が辿って来た道」五十嵐忠孝 ▼ 「南タイ・ムスリム村落におけるイスラーム復興の現在——開発と『平等性』をめぐる村人の対応」小河久志 ▼ Area Study Prior to Companion Modelling to Integrate Multiple Interests in Upper Watershed Management of Northern Thailand. Cécile Barnau; Guy Trébuil; Pongchai Dumrongrojwattana; Jérôme Marie ▼ Space of Resistance and Place of Local Knowledge in Karen Ecological Movement of Northern Thailand: The Case of Pgaz K' Nyau Villages in Mae Lan Kham River Basin. Prasert Trakansuphakorn ▼ Early Years of Serikat Buruh Kereta Api (Railway Workers Union, SBKA):

Formation and Orientation. Jafar Suryomenggolo ▽ 書評 (Book Reviews) 山本博之著、『脱植民地化とナショナリズム——英領北ボルネオにおける民族形成』原不二夫 ▼ Vladimir Braginsky. *The Heritage of Traditional Malay Literature*. Eric Tagliacozzo

◆ *Kyoto Area Studies on Asia*, No.14-17 (Kyoto University Press/Trans Pacific Press)

■ No.14. Nobuta Toshihiro. 2008. *Living on the Periphery: Development and Islamization among the Orang Asli*.

■ No.15. Tamada Yoshifumi. 2008. *Myths and Realities: The Democratization of Thai Politics*.

■ No.16. Abe Shigeyuki and Bhanupong Nidhipraba, eds. 2008. *East Asian Economies and New Regionalism*.

■ No.17. Shiraishi Takashi and Pasuk Phongpaichit, eds. 2008. *The Rise of Middle Classes in Southeast Asia*.

◆ *地域研究叢書* (京都大学学術出版会刊)

■ 17. 石川 登. 2008. 『境界の社会史——国家が所有を宣言するとき』

◆ *研究報告書シリーズ* (Research Report Series)

■ No.117. Tun Aung Chain and Kazuo Ando, eds. 2008. *Change of Rural Society and Local Agro-ecological Knowledge in Myanmar*.

◆ *Kyoto Working Papers on Area Studies* シリーズ

■ No.1. Sugihara, Kaoru. 2007. *Labour-intensive Industrialisation in Global History*.

■ No.2. 藤田幸一；岡 通太郎；Ashok Kundu. 2007. 「インド・シッキム州における傾斜地農業と農家経済——北部県フォドン村における調査報告」

■ No.3. (G-COE Series 1) Ho Dinh Duan and Shibayama, Mamoru. 2008. *Studies on Hanoi on Urban Transition in 20th Century based on GIS/RS*.

■ No.4. (G-COE Series 2) Hirano, Junichi. 2008. *Beyond the Sunni-Shiite Dichotomy: Rethinking al-Afghani and His Pan-Islamism*.

◆ *Bibliography Series*

■ No.3. Nguyen Thi Xuan Binh, compiled. *Bibliography on Vietnam Agriculture, 2000-2005*. 2 vols.

叢書新刊と対象国内限定版の発進

今春、英文地域研究叢書 Kyoto Area Studies on Asia 4冊と地域研究叢書1冊が刊行された(書名・著者名は出版ニュースを参照ください)。

信田敏宏著 *Living on the Periphery: Development and Islamization among the Orang Asli* と玉田芳史著 *Myths and Realities: The Democratization of Thai Politics* の二書は、地域研究叢書の翻訳である。信田著『周縁を生きる人びと——オラン・アスリの開発とイスラーム化』は2006年度東南アジア史学会賞、玉田著『民主化の虚像と実像——タイ現代政治変動のメカニズム』は2004年度大平正芳記念賞を受賞した評価の高い著作であり、その英訳が外国人研究者より待たれていた。

続く2冊の英文地域研究叢書は、いずれも日本学術振興会日タイ拠点大学交流事業による国際シンポジウムでの発表論文を基に編まれた論文集である。*East Asian Economics and New Regionalism* は2003年頃以降加速しつつある東アジアにおける地域化という新しい動きについて、東アジアの研究者との共同作業によって纏めた貴重な成果である。また、*The Rise of Middle Classies in Southeast Asia* は東南アジアにおける中間層の台頭を東アジア全体に及ぶ地域統合と関連づけながら論じた、新機軸の論文集と言えよう。

英文出版については、もうひとつ特記すべき話題がある。信田氏の *Living on the Periphery: Development and Islamization among the Orang Asli* が、最も需要が高い

マレーシア国内での販売を目指してマレーシアの出版社からも並行して出版されることが決まった。現在準備が着々と進んでおり、今年度中には上梓の予定である。これは東南アジア研究所の叢書出版において画期的なことであり、今後もアジア各国においてこの対象国内限定版が刊行されることを大いに期待したい。

3年ぶりの地域研究叢書の新刊は石川登著『境界の社会史——国家が所有を宣言するとき』である。本書は、「東南アジア島嶼部ボルネオ島西部の国境社会に焦点をあて、国家が領域的に生成するプロセスのなかで、国家と国民(nation-state)をつなぐハイフンの意味、国家と社会の相互関係を160年ほどの村落・地域史のなかで検討する」(本書のちらしより) 包括的な議論の試みである。



購入に関する問い合わせは、
京都大学学術出版会
電話：075-761-6182
FAX：075-761-6190
sales@kyoto-up.or.jp まで。

チップさんの訃報



バンコク連絡事務所にて永年勤められたチップさん(本名サムーチャイ・クライトンスック)が、2007年12月23日未明に、交通事故のため亡くなりました。チップさんは1978年以来バンコク連絡事務所に勤務した最古参のスタッフでした。駐在員にとっては母のように、いつも美味しい食卓を準備し、何くれとなく世話をして下さいました。その勤務ぶりは、真に誠実かつきめ細かく機転が利いていて、何人にも代えがたい貴重な存在で

した。過去三十年にわたり、バンコクでの当研究所の研究・交流活動を陰で支えてくれました。ご葬儀には、故郷コラートの方たち、研究所関係者を含む100名を優に超える参列者がありました。また、2008年4月5日、チップさんの出身地であるナコンラーチャシーマ県パクトンチャイ郡のルムカーオ寺で百日の追善供養が営まれました。寺院の布薩堂の門は、数年前にチップさんが寄進したもので、チップさんの母親とともに本人のお骨が、この門に安置されました。バンコクでも、また故郷でも、チップさんが生前熱心に積徳を

していた様子を僧侶が語っておられたのが印象的でした。穏やかなお顔を思い浮かべながら、慎んでご冥福をお祈りしたいと思います。

ご葬儀ならびに百日のご供養には、チップさんゆかりの多くの有志の方々からご供養が寄せられました。ありがとうございました。

(文責：速水 洋子)



上：石井米雄先生と生前のチップさん(連絡事務所にて)
左上：故郷の寺院にチップさんが寄進した布薩堂の門

寄贈図書運命

ハワイ大学大学院で図書館情報学を勉強していたころ、図書館の各部署にインターンやアルバイトでお世話になっていた。大学院自体も図書館内にあったので、一日のほとんどを図書館のどこかで過ごしていたことになり、我が家のような場所であった。そのような勝手知ったる場所である図書館の中に、ちょっと近づくのが怖いと気がないセクションがあった。柵に守られた日本語の大型寄贈本コレクションのあるセクションである。有名な大型コレクションであるそれらは、何十年も整理されずに、知る人ぞ知るという形で、長らくごく一部の研究者にしか利用されていない。院生という立場ながら、なんとなく割り切れない思いを持ったものである。

その後京大に着任して、7年たつ

た。その間、教員が退官される際や、他部局や他機関でやむを得ない事情があって、図書館への寄贈を申し出て下さる機会に自分自身が立ち会うことになった。同時に、受入れて先が見つからない寄贈者、受入れたくても受入れられなかった苦労話を色々な立場の人から伺ってきた。話し手の中には、外国人研究者の方も少なくない。これらの苦労話の背景には、図書館にとっては、通常の業務を超えて、場所と受入れに際しての整理費用を確保することの難しさがああり、蔵書そのものも価値だけで受入れを決断できないという事情がある。また、大きなコレクションの場合、ひとつの思想体系を体現しているコレクションを、まとまりで受入れられないことへのストレスもある。多くの場合、図書館

で働く者は、愛する文献資料によい嫁ぎ先を見つけないという感情を、寄贈者と共有する者であるだろう。ただ、それらを受入れた後、利用に供するまでには超えるべきハードルがいくつも待っている。

当図書室に限らず、寄贈を考えてくださっているみなさんへのお願いです。大型の寄贈は、図書館にとって喜びでもあり、悩みでもあることをご理解頂き、寄贈が断られることがあっても驚かないでください。そして、できればご本人の希望と、図書館側の事情を率直に相談する場を予め設けて下さい。寄贈者とともによい嫁ぎ先、嫁ぎ方を一緒に考えたというのが、私たちの願いなのです。 (文責：北村 由美)

図書室ニュース

今期は、新着資料の中から、タイに関係する歴史資料(マイクロフォーム)をご紹介します。

◇2007年度京都大学大型コレクション経費によって、FO069コレクション(General Correspondence: Siam 1849-1905)を一部新たにマ

イクロ化した上で完全な形で購入しました。同コレクションは1782年の創設以後、イギリスの対外関係の折衝にあたった外務省文書の一部です。

◇G-COEプログラム「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」によって、*British Intelligence*

*on Siam (Thailand) and Mainland Southeast Asia 1887-1948*を購入しました。資料の詳細は、Brill社のウェブサイトをご覧ください。
<http://www.brill.nl/uploadedFiles/501.pdf>

「稲盛財団記念館」建設工事、順調に進捗



昨年秋に着工した稲盛財団記念館は、現在2階部分まで建設工事が進み、計画どおり今年の10月末には竣工の予定である。次号では、新棟の全容をご紹介します。

2008年5月1日発行

発行 〒606-8501
京都市左京区吉田下阿達町46
京都大学東南アジア研究所
Tel. 075-753-7344
Fax. 075-753-7356
<http://www.cseas.kyoto-u.ac.jp>

編集 岡本正明・米沢真理子